UFOと宇宙哲学の研究誌

－日本GAP－

ニューズレター

No.37

UFOと宇宙哲学の研究誌

日本GAPニ ーズレター

第37号目次

肉体の意識の変換（遺稿）……G・アダムスキー 1

ブリストル公園での目撃事件……アラステアー・プレヴォスト 4

アンデス山脈中の目撃事件……ゴードン・クレイトン 6

月面上の神秘……ダン・ロイド 10

パトラーで目撃された宇宙人……ロバート・A・シュミット 12

六千キロの瞬間移動……オスカール・A・ガリンデス 15

家屋内に出現する不思議な人影……チャールズ・ボウエン 17

悪魔との出会い……ジョエル・ムスナール 23
クロード・パ ヴィ

UFO探知機の作り方……コリン・マッカーシー 27

量子流体宇宙船……清家新一 32

肉体の意識の変換（遺稿）

G・アダムスキー

人間は各種の径路を通じてより高度な意識の状態に自分を高揚させることができる。われわれが想念を変換させるならば肉体をも変換させることになる。なぜなら想念が肉体を支配するからである。想念は心の中ばかりでなく肉体の中にもある。それで想念のみが肉体を変化させるのである。人間が心中に抱く想念は宇宙のなかから自分の方へ類似の状態を引き寄せる。われわれが意識を高揚させようとするならば、すでに役立ってしまった過去の各種の状態のすべてを忘れなければならない。われわれは無限の存在という高度な理解に高まらねばならない。高度な速念は肉体中のあらゆる悪しき状態を排除する。高度な想念は永遠の平安のなかに存在する。この平安はわれわれが自分を理解し始めるにつれてやってくる。それ以外の方法で来ることはない。調和に到達するまでにわれわれは自分を理解しなければならない。人間の意識は巨大な変圧器のようなもので、自分の望み通りの電力を取り入れて、それを肉体の一部から別な部分へ流して肉体を変化させることができるのである。

われわれが想念の中の〝意識的な力〟について意識するならば、自分の意識によって完全に肉体を支配することができるのである。われわれの意識が正しく機能を果たしていなければ、あらゆる治療法を試みても何にもならないことがある。それで想念の意識的な力を理解することが如何に必要であるかがわかるのである。われわれの意識が〝父の意識〟と完全に一致しているとき、それは無限となる。人間は〝父〟のコピーであるからだ。自分の何たるかを知ったならば、次に自分の望む物または状態をしっかりと心に描いて、望まない想念を排除しなければならない。すると自分の望む物がそのとき正しいものであるならば、必ずその結果を得るのである。しかし人間は永遠の法則の働きについて信念と確信を持たねばならない。

次のような例をあげてみよう。かりに一人の人間が或る状態を高度なまたはより良き状態に変えようとするのなら、本人はまず想念をより高度な状態に変えて、「よき状態が来るのだ」という信念を持たねばならぬ。本人が肉体の意識中に（注＝肉体の意識というのはいわゆる普通の〝心〟）ちょっとでも疑惑を起こすならば、望む状態の実現を妨げることになる。カラシ種ほどの小さな疑惑でも実現を妨げるが、何の疑惑も持たないでカラシ種ほどの大きさの信念がありさえすれば、如何なる状態をも達成できるのである。人間は高揚させた意識的な想念のなかに確信を持たねばならない。すると高度な状態が起こるのである。確信に欠けるならば本人は肉体意識を高揚させるかわりに低下させるのである。人間はより高度なより良き物事を望むことによってのみ、野蛮な状態から現在の文明へ進歩してきたが、必ずそうなるという絶対的な確信を持つ必要があった。そしてその確信が人間を成功へ導いたのである。

昔の純な状態の人間は肉体中にあるこの意識的な想念の力を現

代の文明人よりもよく理解した。彼らは神の摂理をおそらく極端に信じたであろう。だからときには自分自身を傷つけたのだ。これは〝父〟が人間に極端主義者になることを望まぬからである。現今は人間が創造主を信じないために人間はあらゆる物やあらゆる人間を利用する。昔の純な人は一定期間内に必要な物だけを持とうとするが、現代人は必要以上に物を貯えようとし、同胞の必要物について考慮を払おうとしない。この状態は人間の肉体の心を信念から無信念へ変えたために生じたのである。昔の純な人はわれわれが現代に持つような知識を持たなかったかもしれないが、もっと公正であった。彼らは自分の想念をコントロールすることができたが、現代人はコントロールの力を持たない強力な肉体意識を獲得した。そのために性質を低下せしめたのである。自分が想念の支配者になるかわりに想念を支配者にさせてしまい、意識的な想念の力を自分のものとする方法を知らない事実に気づき始めている。想念はカンシャクを起こして暴れまわり、人間を混乱させているので、人間は確信の状態で生きるかわりに恐怖の状態で生きている。今日人間があらゆる人を恐れるのは、自分が他人を傷つけ得るほどの力があるので他人も自分を傷つけるのに同じ力を用いはしないかと恐れるからである。もし人間が自分のとってきたあらゆる段階を分析することによって自分の肉体の意識を変えることに時間をかけるならば、現在は自分の想念と自分に関するあらゆる物を持っているだろう。

このようにして人間の主体性は成長するのである。自分の力はこれまでのようには自分をおびやかさなくなるだろう。なぜなら想念の法則を知り、それを意識的に正しく応用する方法を知るからである。われわれは電気において類似の原理を見出す。電気はその扱いを誤るならば人を殺すが、正しく扱うならば役立つのである。意識的な想念の場合も同様である。それは人を殺すほどに強力である。医師はその状態をショックと呼んでいる。

われわれがこの力を用いる方法を知るとき、それはわれわれの召使いとなる。想念の悪用は自分を破壊するが、善用は調和ある状態をもたらす。永続的な喜びはわれわれが肉体の意識の主人公になることを知るときにのみやって来るからだ。人間は一つの目的のために自由意志を与えられてきた。それは人間を導こうとして内在する或る高度な意志に人間の意志を服従せしめることによって人間の意志を支配することである。われらの〝父〟は人間が他人や他の物に支配されることを望んではいない。〝父〟は人間に力を与え、人間がその使用法を知るように仕向けた。いわゆる心なるものが正しい支配のもとにあるならば、正しい場所で正しい時に正しい事をやり、人類の福利のために働く。これはより高度な意志の現われである。この意識的な知覚力が手綱を取り、肉体の意識に支配されないで逆にそれを導く。そのとき恐怖が消滅するからである。

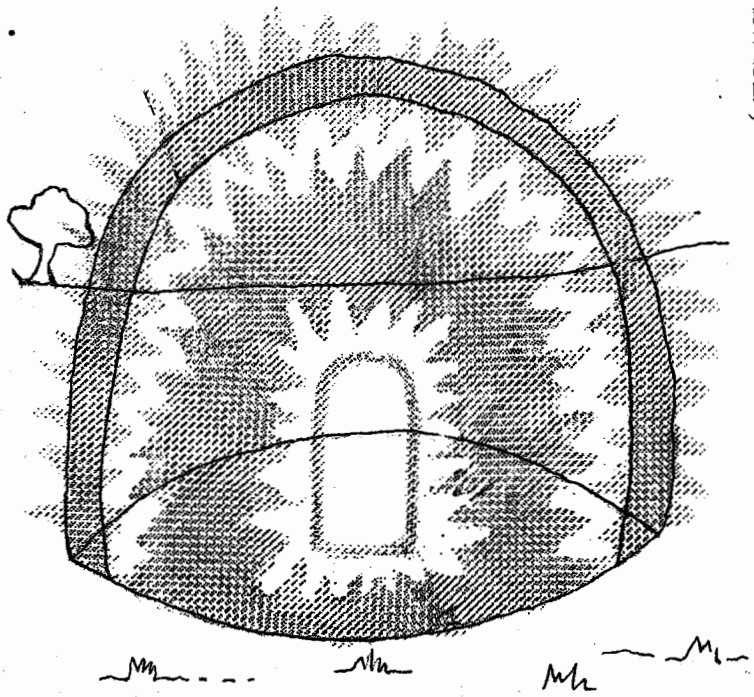
暗い小道にいる人は恐れて、きわめて注意深く自分の足取りを警戒する。前方にあるものが見えないからだ。肉体の心は暗黒中でも働いていて、何物かが進行を妨げたり傷つけたりしないかと恐れながら絶えず自分の歩みを気づかう。肉体の意識で機能を果たしている人間は前方の光が見えない。結局本人が放射する恐怖念波のために動物が襲ったりするのである。

人間はこれまでに指導者であるべきはずの神の手綱を放してき

て、今や深い悲痛と苦悩にさいなまれているが、結局は何かが間違っているということに目覚め、援助を求めて宇宙をのぞき始めている。そのとき人間は理解を求めて神へ眼を転じる。彼は〝父〟のもとへ帰ってゆく放蕩息子である。彼はがむしゃらに世の中へ出られると思っていて、勝手気ままに振舞ったが、ついに自分の肉体の意志によって生活の諸状態をコントロールすることはできないことに気づいた。人間がすすんで前進するならば全英知の一部を共有できるし、真に望む物を得ることができるのである。この歩みを続けるならば、自分の一体感を通じて低い諸要素を支配でき、個人の欲望のためよりも全体にたいして奉仕できることがわかるのである。真の知識もないのに人間は自分に向けられていない諸要素を取り入れた。人間をトラブルのなかに引き入れるのは個人的な意識である。その意識が悪状態を引きよせるからだ。人間が手ひどく傷つくときに神すなわち生命の実体の方を見始める。人間がこのようなトラブルにはまり込んだとき誤った選択物を捨てねばならぬのにときとして全力を出す必要が起こる。

人間はどんな方法で自分自身を発見するのか？　それは人間が生命の実体を知り、真の自我を知るとき、一歩進んで新しい衣装を着ることになり、「父の意志が行なわれる」と言明できることを知るのである。これを行なうとき、誤った諸状態は消滅し、悲痛はみずから去って行くのである。

われわれがこの知識と一体化するには、古い思想を投げ捨てて生命の方へ向かって新しい態度を取らねばならぬ。換言すればわれわれは誤った概念を洗い流さねばならない。しかし小さな幼児が自分で自分のからだを洗い流すことができないのと同様に、肉体の意識もみずからの力で誤った概念を洗い流すことはできない。幼児は母親にからだを流してもらう必要があるが、同様に人間の非個人的な意識こそ個人の心を洗ってくれる母親なのである。これが人間にとって唯一の救いである。



この図はブリストルの公園で目撃された物体（次頁の記事参照）

ブリストルの公園での目撃事件

アラステアー・プレヴォスト

一九六八年四月二十七日の午後九時二十分に、ブリスリントン、聖クリストファー教会の牧師アンソニー・ミリカン師は、人気のないアーノス公園中を妻と共にたそがれ時の散歩を楽しんでいた。この公園はブリストル市（注＝英国南西部の工業都市で重要な貿易港）のブリスリントン側にあり、ブリストル市のこの郊外一帯はグロスタシャー州からサマセット州にまたがる地域である。

時は終日降り続いた雨のあとのかなり暖かい夕方であった。視界は澄んでいて風もなく、空は約八分の三ばかり薄雲があるほかは晴れていた。あたりに飛行機は見えなかった。

突然、何の前ぶれもなしに夫妻は七十五ないし百ヤード離れた位置に地上から六フィートの高さに浮かんでいる一個の光る物体を見たのである。回転しているようであり（注＝コマが廻るように自転軸を中心にして回転することを意味する）、一個所にジッと浮かんでいるようであったが、目撃中この動作は変わらなかった。

このドーム型物体は概算高さが十二ないし十五フィート、円周が十ないし十二フィートあると思われた。完全な左右相称型で、一部がふくらんだりへこんだりすることはなく、ずっと釣鐘型のままであった。物体の外縁の色はよごれた黄色だが、フチの内側は灰色がかった白で、この内部の光は強さが不規則に変化するように思われた。全体が透明であった。というのはその位置のむこう側にある坂の頂上の線が物体をすかして見えたからだ。目撃しているあいだ音響は聴こえなかった。

運悪く私はミリカン師夫妻を訪問する好機がなかったが、師宛に送った質問にこころよく答えてくれたので感謝している次第である。

彼が答えた要点や詳細のすべてはこの記事中に述べてある。その回答において彼は一つの奇妙な特徴に言及した。高さが四ないし五フィートばかりの中央の柱である。だが彼はこれが固体らしき物かそれとも異なる光の激しい集中状態なのかは述べていない。

約二十秒ばかりしてから物体はぼんやりと薄れながら消えていった。目撃者はその夜十時にこの事件を警察へ通報した。あとでブリストルの署長は完全な報告書を受けとったし、ブリストルの教会の監督にも知らされた。

以上の他に私がミリカン氏とかわした質疑応答は次のとおりである。

問　あなたはそのときだれか他人の注意をうながしたいと思いましたか。

答　いいえ、私たちは恐ろしさで一杯でした。

問　その目撃はあなたにとって異常なものでしたか。あとでそれを普通の言葉で説明できましたか。

答　きわめて異常なものでした。私は普通の言葉で説明できませんでした。

問　その地域には空中に送電線がありますか。

答　ありません。しかし付近にテレビ放送局があります。

問　目撃中かまたはあとで肉体的な影響が起こりましたか。

答　冷たい感じがしましたが、これは神経の反応のせいでしょうか。妻は三時間も冷たく感じておう吐しましたが、これはショックのためでしょう。また妻はその夜ひどくうなされて物体の夢を何度も見ましたが、私は大丈夫でした。

問　あなたはＵＦＯについて知っていますか。

答　いいえ、新聞記事で読んだ程度です。

問　あなたの体験をふり返ってみて、今それを別な工合に説明できますか。

答　できません。

問　この目撃は一般のＵＦＯ現象に関するあなたの考え方に影響を及ぼしましたか。

答　はい。私が〝何かを〟見たという意味で影響を及ぼしました。しかし正体についてはまだわかりません。それは大いなるシルシ（マタイ二四・二四）だったかもしれないし、〝墮落した実体〟の物質化だったのかもしれません（エペソ書六・一二にある天上の悪の霊のことか？）。一化学者は鬼火だったかもしれないと考えています。

問　警察はすぐにどんな反応を示しましたか。

答　真剣でした。しかし彼らは何の発見もしていません。

問　その夜かまたはそれより前の数日間に、その地域に他の目撃事件がありましたか。

答　はい、ありました。ウォーミンスターの上空（日時は不明）と五月五日の日曜日午前四時十分にブリストル上空に発生しました（詳細不明）。

問　地元新聞の態度はどうでしたか。

答　五月二日付のニュー・オブザーヴァー紙に見出しが出ました。（注＝これはデイリー・ミラー紙の数頁を飾る記事ともなった）

さて前記回答中にある五月五日の目撃事件の詳細は次のとおりである。

一婦人―住所氏名は秘す―が目覚めてベッド上に上半身を起こしていたとき、オタマジャクシのように尻尾のある大体に円型の物体がゆっくりと窓の外を通過してアーノス公園の方へ無音のまま飛ぶのを見た。明るいレモン色で、前記の物体ほどに明確な説明は不可能である。五ないし十秒間屋根の上を低く飛んだが、腕をまっすぐ伸ばして手にのせたフットボール位の大きさに見えたという。

私はまた約五年前に一団のティーンエイジャーたちが牧師が見たのと似たような物体を同じ場所でしかも土曜日の夜九時頃に見たことを知った。一同が近づくにつれて物体の輝きが増した。みんなは恐ろしくなり、一人は泣きながら走って帰った。一同が恐れすぎたのか若すぎたのか、その筋には通報しなかった。

例の化学者の最後の言葉は次のとおりである。「これは土地の墓地のガスから発生した鬼火ではないかと思う」

アンデス山脈中の目撃事件

ゴードン・クレイトン

この自称体験なるものの現場はちょうどチリーとアルジェンティンの国境にあたる所で、アンデス山脈の雪深い峰々のなかの、南緯二十七度、西経六十九度の地点である。インカウアシとラストレスクルーセスが巨大な支峰群中の二峰で、両方共約六千六百二十メートルの高さがある。この地域はアルジェンティンの多数のＵＦＯ報告が指摘しているように、異星人が基地を建設していると考えられている高地のアタカマ荒地帯の南側に近い距離の所である点に注目するのは興味深いことである。

この記事はチリーＵＦＯ研究グループ発行の機関誌第八号と第九号から再録したもので、こちらにまだ到着していない第四号と第七号にもこの事件に関する記事が掲載してあるが、催眠状態下でしゃべった基本的な体験それ自体はすべてここに含まれていると思われる。

概　略

目撃者マヌエル・ムニョス・カルヴァハル（二十五才）はラセレーナ地方病院の運転手で、アンデスの高所にある或る学校へ一団の人々を運んだらしい。彼は高度のためにひどく影響を受けた。それで事件というのは山岳地帯をくだった或る駅の医師を訪れてつれ帰される途中で発生したものらしい。

本人の〝体験〟後、マヌエルはダルヴィン・アリアガダ・Ｌ博士（氏名のあとにＬをつけるのは南米人の習慣によるもの）によって催眠状態下で扱われた。以下はその記録である（注＝問は博士、答はマヌエル）

問　マヌエル君。さあ君が円盤を見たという機会について絶対正確に話してくれたまえ。では、その日時はいつかね？

答　六月です。

問　君が運んだ仲間の一人は病気だったと言ったね。それはだれかね？

答　私でした。

問　君が病気だった。・・・ふん、するとみんなが君をインカウアシへつれて行ったの？

答　私はレイヴァさん（山頂にある学校に一夜滞在した人）に話しました。するとインカウアシの医者に会うためにデスヴィオノルテへ行く許可を与えてくれました。インカウアシから帰る途中濃い霧がたちこめていました。一同はトレスクルーセスへ着きました。私たちは全道筋のなかで最もけわしい峰を登って行きましたが、頂上へ到着する頃には霧も晴れ始めて、一行の眼前の空中を一個の火球が飛びました。左から右へ、つまり山側から海側へかけてです。すると一行の一人が流星だと言いましたが、私は流星なら落ちるときに分解するから流星ではないと言いました。しかもその火球はどうやら光で推進しているらしく、続いて消えま

した。一同はどんどん登り続けて峰へ到着しましたが、そのとき仲間たちが道路を一台のトラックがやって来ると言います。私にはトラックではないことがわかりました。その音響がすさまじかったからです。一同は停まりました。車を停めて外へ出て前方へ歩きだしました。私の神経は弱っていたし、すでに高地のために山酔いにかかっていたので、息がとまるほど驚きました。大変なショックです。

問　そうかね？　君が見たものを残らず話してごらん。

答　大きな球でした。私からの距離では紙風船のように見えました。―空中へ放してまた降りてくる風船の一つに似ていました。だが一同が停まってライトを消すと、非常にやさしい〝月〟がありました。明るく輝いていて光を放ちながら燃えているのです。私は仲間に引き返すべきだと呼びかけました。恐ろしくて、それが気球でないことがわかったからです。車は道路巾一ぱいで、方向転換の場所もなかったので、そのまま前進しました。エンジンをかけたとき、私は・・・・私の仲間はライトをちょっとつけるように言いました。車は少し前進しましたが、大きな球体はなおも近寄ってきて。それが放った光は月光よりも強烈に車の運転台の内部を照らしましたので、長く見ていると眼が傷つくほどでした（マヌエル沈黙する）

問　それからどうした？

答　そうですね、それから車は移動を続け、球体の下を通りすぎて約一キロばかり山を引き返しておりたと思われる頃、走行計を見ましたら一キロ以上も動いていたことがわかりましたが、球体も同じ距離を保ちながらこちらのあとをつけて来ました。それがわかったとき、午前四時四十分頃でした（沈黙）。

問　君が見た球体について詳細に話してくれたまえ。その火球の形はどうだった？

答　それは・・・それは丸くなくて・・・・ほんとうのまん丸の円形ではなく、クルミのような、クルミのような形だと思います。

問　その球体から光が輝き出ていたかね？

答　ええ、光線（複数）と一つの輝く光がありました。するとそれはオレンジ色に変わりました・・・・強い中間黄色にです。そして頂上からアンテナみたいな長い〝ツノ〟がつき出ていましたが、二本だけありました。球体は三十分ごとにその光の色を変え続けました―すみません―三十秒ごとです（この体験のあいだマヌエルは与えられた薬品の効果により眠り込んでいた。そしてこの中断期間中にマヌエルが何か奇妙な〝人間〟の夢を見ていたことがわかった。この夢の件はあとで発表することにしよう）。

問　さあ、君が夢から覚めたあとでもまだ恐ろしかったかね？

答　はい。

問　ふん、じゃあその次に君たちは何をしたかね？

答　一同はドライヴを続けましたが、球体はわれわれの前方を進行し続けました。あの場所で停まったとき、私は眠り込む前に、その大きな球体の周囲に別な小さな物体群がいるのを見ました。小さいのは六個でしたが、二個一組ずつになっていました。大きな物体の下部には一種の船室があり、そこに三つの動かない頭が見えました。

問　三つの動かない頭。どんな形だった？

答　三つの黒い物というだけのことで・・・・ほかには言いようがありません。
問　それじゃあ・・・・そのときショックを感じたかね？
答　ええ、とても感じました。私は前方へ歩こうとしましたが、動けないんです。
問　なぜ？
答　自分でもわかりません。
問　からだの力が抜けてしまったの？
答　完全に動くことができませんでした。
問　ねえ、このとき眠り込まなかった？
答　眠りました。
問　眠っているあいだにどんな夢を見たかね？　君は眠り込んだという。どんな夢かね？（博士は声を強めて言う）
答　私は眠り込みました。左手には山脈の峰々がありました。私が見た夢は球体から出て来て歩きまわっている多くの人々です。
問　君の夢を話したまえ。その人々はどんな姿をしていたかね？
答　みんな緑色で・・・・丸顔でした。
問　丸顔。その眼はどうだった？
答　大きな眼です。
問　長い眼？　それとも違う？
答　丸くてかなり突き出た眼でした。
問　その人々は君の夢のなかで何と言ったかね？
答　相手の人たちが一方の側から他方の側へ動いているのが見えました。彼らの二人がいました。・・・・私は恐ろしさで目覚めて、何か見えるかと外を見ました。恐ろしいので車のドアーにカギをかけました。
問　よろしい。その人々はほかに何をしたかね？　彼らの身長は？
答　約一メートルないし一メートル二十センチでした。
問　小さかったわけだね？
答　そうです。非常に大きな頭をして・・・・丸い頭で長い首です。
問　彼らには足があったかね？
答　ええ。
問　人間に似ていたかね？
答　非常に広い胸と細い腰をしていました。からだには衣服と同じような皮膚がありました。からだを包んでいる外被は普通の衣服のような型で、足は細くて、ヒザがないかのようでした。
問　君は仲間に話しかけたかね？（目撃者は夢を見ていたことを想起されたい）
答　いいえ。先方の人々は車のまわりをぐるぐる歩きました。あたかもわれわれから眼を離さないようにしているかのようです。・・・・私は目覚めていて、今度は運転をしていました。道路のまがりかどで私は見ました。
問　円盤を？
答　いいえ、あの小さな男です（マヌエルは今、帰途の翌日のことを話しているのであって、そのとき彼は調査者のレイヴァにその男のことを知らせた。この出来事は真実である）。
問　よろしい。しかし君はすでに目覚めていたんだね？
答　はい、私は目覚めていました。
問　君はふたたび彼を見たかね？

答　ええ、ふたたび見ました。私は道路のまがり角の所で一人の男を見たと仲間に話し、レイヴァさんにも話しました。それで翌日ふたたび一同はそこへ行って場所をつきとめましたが何も見えませんでした。

問　その男は君が夢の中で見たのと同じ男かね？

答　そう、同じ男です。

問　相手は何か身振りを示さなかったかね？　君に話しかけようとはしなかったかね？

答　ええ、全然しませんでした。

問　相手の耳の形はどうだった？

答　犬の耳みたいです。

問　犬の耳？　とがっていた？

答　ええ。

問　その男たちは手に何かを持っていたかね？　彼らは特に何も運んではいなかった？　その点はたしかかね？　彼らがどんなふうにして円盤から出て来たかわかったかね？　（沈黙）　おぼえていないの？　よろしい。先へ続けよう。飛ぶ物体が翌朝いなかったとき君はかなり落ち着いただろう？　次に何をした？

答　（沈黙）私は眠りました。

問　そう？　まだもっと夢を見たかね？

答　ええ。

問　何の夢を見た？　（沈黙）　言ってごらん。　（沈黙）　同じ人間たちの夢を見たのかね？

答　ええ、その人間たちが一行のいた例の学校や鉱山のある山々の頂上を歩きまわっている夢を見ました。

問　ほかに？　彼らは君に何をしたかね？　今度は相手は何人位いたかね？　数名？

答　五名です。彼らはまっすぐに学校へ来ました。夢の中で私は・・・・（沈黙）・・・・そのことはだれにも話すなというメッセージを私に送っているかのようでした。

問　そのことは何も言うなと？

答　そうです。

問　それはどんな工合に？　彼らは君に伝達した・・・君は彼らの声が聞けなかったのだから・・・どういうふうに伝達したのかね？

答　彼らが私に伝えたということを何となく夢に見たのです。

問　一体どうして他人に話してならないというのだろう？

答　そのことは他人に話してはいけないというんだから―。

問　だれにむかって話してはいけないというのかね？

答　他の人々です。

問　なぜ？

答　それは彼らも言いません。

問　なぜ言わなかったのかね？　君をおびやかしたの？

答　いいえ。

問　なぜ？　彼らがどんなふうに君に伝えたか言ってごらん。（沈黙）　それについては何も話すなと伝えたこと以外にその人間たちは何か君に指示したかね？

答　いや、それだけです。一緒に歩いているのは三人でした。私たちのすぐそばに彼らがいるのがわかりました。まん中の一人がリーダーのようでした。

問　よろしい。さて、一つの事を話したまえ。君は彼らの声が聴こえなかったかね？　聴こえなかった？　じゃあどのようにして君にその言葉を伝えたのだろう？

答　何かが私の頭の中へ入って来るような感じがしました。それだけです。

問　よろしい。じゃあそのあとで君は眼が覚めたのだね？　君の夢をおぼえていたかね？

答　はい。

問　なぜ二日後に私の所へ来たの？

答　だれにも話したくなかったからです。

問　なぜ？

答　みんなが笑うでしょうから。

問　言ってごらん。なぜ君は夢のその部分を私に話さないのかね？君が私に話さなかったただ一つの部分はどれかね？　（沈黙）なぜ？

答　あなたが私を信じないだろうと思ったからです。

問　君を信じないって？　ふん、じゃあ、それ以来その人々の夢は全然見ていないんだね？　（沈黙）　つまりあの人々の夢だ。君が見たあの人々の夢をもう見ていないのかね？

答　見ていません。

問　全然見ていない。よろしい。じゃあ君は起こったあらゆる出来事を完全に記憶していたのだね。

月面上の神秘

ダン・ロイド

人間が最初に空を凝視して天体について思索して以来、月は畏敬と尊崇の対象となってきた。古代の崇拝者はそれを神として見上げたし、詩人や恋人たちは同じく神々しい力を有する物といつも感じてきたが、今やわが宇宙時代の科学者はこの地球の衛星の永遠のナゾにもう一つの神秘を加えたのである。

一九六六年十一月に米国の宇宙ロケット、ルナ・オービター二号が打ち上げられ、十一月十八日に月の探索使命を開始した。十一月二十一日に四十八キロ（三十マイル）の高度でこのロケットの望遠レンズが静の海の一小部分を撮った一連の写真を地球へ送信した。月の中心部の北東にある乾いた平地である。

ここに示される写真（注‖本誌第34号に掲載）は百六十五メートル×二百二十五メートルの地域にわたるもので、ケアリフォルニア州のゴールドストーン追跡センターで記録された原板を五倍に拡大したものである。写真では月の表面に六個の大釘型の影をはっきり示している。科学者はこの影を月の前代未聞の特徴の一つと言っているが、影を投げている突起物は月面の自然の地勢であると感じている。

しかしシアトルの人類学者でボウイング社の生物工学班の一員であるウィリアム・ブレアー氏は、この〝尖塔群〟は人間が建て

た円柱群に似た幾何学的な図形を描いていると述べている。

この尖塔群は一時的な知的生物の仕事だと断言するわけではないがと強調して氏は次のようにつけ加えた。

「もしこのような建造物の合成体が地球上で撮影されたなら考古学者の最初の仕事は調査の上でテスト用のトレンチを堀って、目をつけた場所が考古学上の意義があるかないかを確認するだろう」

氏はコンパスと分度器でその写真を入念に調べたところ、尖塔群が六つの二等辺三角形と各三個の点から成る二本の軸線とによる基本的なXYZの直角座標を形成することを発見した。

氏はまた七十フィートの高さがあると考えられる最大の尖塔の真西に、大きな長方形のくぼ地または穴のように見えるものを写真中に発見した。このくぼ地からできる影は四つの九十度の角を示すように思われ、そして堀られたくぼ地型構造物に似ているとブレアーは言う。

ブレアーはこの写真を米国南西部にあるかもしれない先史時代の考古学的な遺跡を探すために航空地図を利用したのと同じ方法でこの写真を分析した。

彼は地球の構造物において幾何学的な模様を探すのを常とした。

「それは原始的な遊牧民族を除いて、人間は幾何学的な形の単純かつ多様な構造物を建設する傾向があるからだ」

ブレアーの推論にはルナ・オービターを作ったボウイング社の宇宙科学者の殆どが賛同しなかった。彼らは月面上の何かの自然現象によって尖塔群ができたのだと信じている。

月理学の専門家でボウイング科学研究所のリチャード・W・ショートヒル博士は「月面にはこんな岩石は沢山ある。手あたり次第に岩石類にあたってみれば、結局は何かの模様に従うように見える一グループを発見するだろう」と言う。

しかしブレアーは確信を持つ。もし右と同じ原理が地球上のこのような特徴（この月面写真のような特徴）の起源を探るために応用されるならば、現在知られているアステカやマヤの建造物は自然の地球物理学的過程の結果たる樹木やヤブの散在する地下に依然として未発見のままにあることになると彼は言う。

「こうなると考古学の科学は決して発達していなかっただろう。そして人間の自然科学の進歩に関する現在の知識の殆どはなおも神秘のままとなっているだろう」

かくて科学者たちが論争を続けているあいだ、月は相変わらず大きなナゾのままとなっている。環列石柱（注＝英国のソールズベリー平原にある有史以前の二重円陣巨石柱群）や類似の先史時代記念碑類の巨石群と月面の尖塔群とのあいだの何らかの関連について推論するのは魅惑的である。

しかしこのような推論は知的な遊びとはなっても事実の客観的な蓄積の代用物とはならない。充分な事実が集められたとき、それらがみずから語り出すのだ。学説というものは事実に適合するように改作されることもあるが、事実を学説に適合するように曲げることはできない。ゆえにわれわれは人間が月のナゾの微笑を解明する地位につくまでは、月に関する事実をまだうんと多く必要とするのである。

パトラーで目撃された宇宙人

ロバート・A・シュミット

一九六七年三月二十日の夜もふけて十時四十五分頃（東部標準時）、ペンシルヴェイニャ州パトラーのリブル氏とその娘ジーンは、或る異様な光を見ようとして近隣へドライヴに出るために自家用車を引っぱり出した。その光（複数）というのはリブル夫人がかねてから目撃したもので、「低空をスイスイと飛び廻る」と語っていた。

リブル家は家屋や農場が散在する人口の少ない地域にあり、またセスナその他の軽飛行機が使用する或る個人用飛行場から一マイルの所にある。リブル氏の家族は夜間飛行を見慣れているので、夫人が見た光体群は付近を夜間に飛ぶ飛行機の機体にあるランプ類だとは全く考えられなかった。それは異様な動き方をする光体群の奇妙な行動なので、リブル氏とジーンは車で調査に出かけることにしたのである。

二人は裏道一帯を乗り廻したが、当初何も見えないので、道路を離れて車のライトを消し、事件が発生するのを待つことにした。

光　球　群

駐車して数分間しかたたない頃、もっとよく見ようと思って車外へ出たリブル氏は、道路から約一マイルむこうの二百フィート上空に二個の光球を見つけた。二人が駐車した裏道はその観測地点から少なくとも一マイルほど下り坂の直線コースとなっている。最初から光球がよく見えたが、それは肉眼で見る際の満月よりわずかに小さかった。

光体は互いに少し離れて平行したままリブル父娘の方へ進行して来た。約半マイルの所まで来たとき光体はそれぞれ位置を変えたが、同じ平行な進路と相互間の距離を保ち続けた。しかしそれらはかなり大きく見えてきて黄白色に輝いたけれども、進行中に地面を照らしはしなかった。

リブル氏と娘は最初二機の自家用機が着陸用ライトをともして、車のとまっているハイウェイに着陸しようとしているのだと思ったが、これに反する二、三の要素があった。無音であること。自家用機なら多くの小標識燈をつけていること。しかも三月の暗黒の夜空を確実な編隊飛行を行なって最後に無燈火の狭いハイウェイに着陸するとはベテランの高等飛行士でもやれそうなことではない。

リブル父娘は高まる関心をもって二個の光体が坂道の四分の一マイル彼方の道路上に着陸するらしい様子を見守った。すると光体は時速約七、八十マイルのスピードで坂道を進行して昇って来たが、それは二台のオートバイのヘッドライトが十フィートの間隔をおいて競争しているようだった。リブル氏が車のそばで恐怖のためにマヒしながら立っていると、ジーンが父親にむかってわめいた。「キャーッ！　車の方へ来るーッ」

衝突コース

リブル氏は車の窓から手を入れてヘッドライトをつけた。しかし不思議な光体は車との衝突コースを前進し続けて、やがて五十ヤードの所まで来るとフッと消えてしまった。避けられない激突だと思ってうずくまりながら極端に緊張していた二人は、驚いたことに車の鼻先から数ヤードむこうに五人の人影が不揃いのまま半円形で立っているのを見たのである。これでよけいにショックを受けた二人はあわてて飛びさがった。

奇妙な人間たち

数秒たたぬうちに父娘は車に乗り込んだ。父親が車のエンジンをかけて後退しようと一生懸命になっているあいだにジーンは〝人間ども〟をよく見ることができた。彼女は次のように語る。

「相手は車から約十フィートむこうに立っていました。みんな人間のようだったけど、顔は全く無表情で人間の顔みたいではなかったわ。眼は—眼と言えるなら—この長さくらいの水平な長い切れ目なのよ（と言いながら切れ目の長さを示すために人差指と親指をひろげてみせる）。コウ彩やひとみは見えなくて、ただ切れ目だけだったわ。鼻は細くてとがっていて人間の鼻みたいで、口は眼と同じように切れ目でした。

相手のうち四人は身長が五フィート七インチくらい。五人目はかなり低くて約五フィート。みんな天井の平たい野球帽に似た帽子をかぶっていて、その下には金髪がのぞいていたわ。四人の背の高い人間たちの髪は耳まであったけど、背の低い人の髪は肩までたれているの。女じゃなかったかしら。耳はよく見えなかったわ。

五人ともみな少しゆったりした同じ型の服—ハンターの服装みたいな薄緑色のシャツとズボンを着けているのよ。何もかもだぶだぶしていたわ。

顔と手の皮膚はザラザラしていて、キズだらけの筋肉、またはひどく焼けた皮膚に似ていたわ。

何もしないでただ立っている相手を見るとゾッとするような感じでした。光体や人間に関連した物音は聴こえないの。父は車中へ入ろうとしてドアーの把手を殆ど折るところだったわ。エンジンをかけたとき一たん後退してから相手をよけて前進したけど、車は道路の端においてあったので、まっすぐに前進したら、相手はまん前に立っているのだからみんなをひき倒したでしょう。

今日までこの事件の詳細が私の心中にはっきり残っているわ。私にも父にとっても最も忘れがたい体験でした」

調査

リブル氏が調査者たちに語ったところでは、彼は逃げることに夢中になっていたので、車中の後部座席から娘が見たものについては娘の説明にまかさねば仕方がないが、〝人間たち〟をチラリと見たのでその人数と背の高さには同意するという。

最初リブル父娘は家族の親しい友人だけにしか体験を話さなかった。二人は他人の嘲笑によってリブル氏の仕事に重大な影響が

起こることを恐れた。その仕事というのはバトラー地区における重要なものである。そしてこのような奇怪な事件に関連して彼の名が表沙汰になれば身の破滅を招くだろうと思ったのだ。ジーンは土地の高校の特待生である。

一九六七年十月下旬にピッツバーグUFO研究会はこの事件に徹底的な調査の手を加えた。この頃までにはリブル父娘は研究会々員の行なっている種々のまじめなUFO研究について聞いていた。会員の殆どは各自の専門分野において学位を持つ科学者である。そこで父娘は会員たちに情報を伝えることにした。

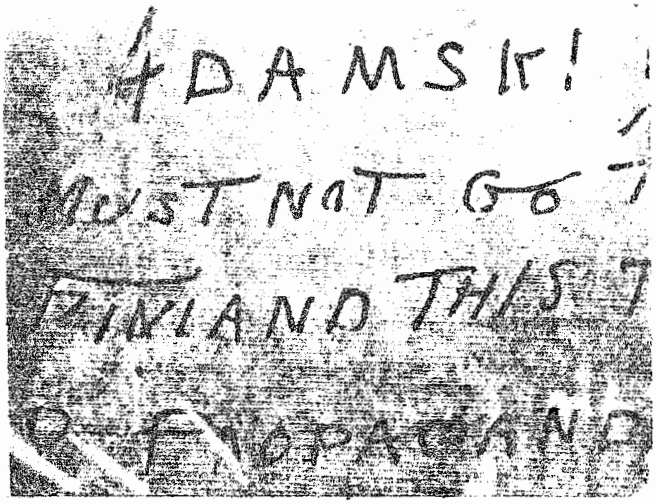
調査者たちはリブル父娘が賢明な人で、友人や近隣の人々によく知られ、好かれている人物であることを発見した。事件のあらゆる点をきびしく追求して対話をテープに録音した後、研究会は父娘が述べた話を疑う理由はないことがわかった。

質問攻めにあったジーンは最初慎重に発言を避けた新しい事柄を話し出した。どんなにバカらしく聞こえようとかまわないから、事件に関連した事でほかに興味ある事実はないかと尋ねられて、彼女はかなり重大だと思われる奇妙な体験を告白した。

「光体が道路上を車の方へ急速に接近するにつれて、私は頭の中に多勢の声を聴きました。―耳でなく脳の中でそれを感じたようだったわ。こんなふうに響いたの。『動くな・・・・動くな・・・・動くな・・・・』声は『動くな』をくり返し続けたけど、その声は『うーごーくーなー』というふうに間伸びしていたわ。光体が消えたとき声も同時にとまりました。父は何一つ聴いていません。それで私は幻聴を起こしたのかと思ったわ。―だけど今はよくわからないのよ。ただそのことをお話したかっただけです」

会員たちは、病的興奮状態に近かったジーンは事件後ただちに土地の教会の牧師の所へつれて行かれて慰められたことを知った。父親も行った。牧師も父親も〝悪魔〟がみずから出現したのだと考えた。牧師は（名を秘すように要請した）父娘の証言を確証した。リブル氏はしばらくしてからあの奇妙な事件の跡が何か残ってはいないかと思って現場へ引き返したが、何も発見できなかったという。

この写真は1963年にジョージ・アダムスキーがヨーロッパへ講演旅行に行った際デンマークのホテルの自室へ投げ込まれたブラザーの筆跡を示す手紙の一部。フィンランドへは行くなと警告してある。



六千キロの瞬間移動

オスカール・A・ガリンデス

最も奇怪な瞬間移動（テレポテイシュン）の一例が今年五月に発生して、アルジェンティンの主要日刊紙の大見出しとなった。フライイング・ソーサー・レヴュー誌はすでにこの種の現象に関する記事を掲げたが、今度の重大な新事件はあらためて瞬間移動の問題にわれわれを注目させるものである。

われわれの資料調査によると、一九六八年五月上旬にヘラルド・ヴィダル博士というブエノスアイレスの著名な弁護士が夫人ラフォ・デ・ヴィダルと一緒に首都ブエノスアイレスの南方百二十キロ以内のチャスコムスの町へ家族の会合に行ったらしい。

真夜中ちょっと前にそのパーティーを辞して、二人はチャスコムスの南方百五十キロばかりの町マイプへドライヴすることにきめた。そこには親友や親類がいるのだ。

二人は国道二号線を進行したが、前方にはやはりマイプに親類のある別な夫婦が車で先行していた。この別な夫婦の名は不明だが、彼らは異状なくマイプに到着したけれども、ヴィダル夫妻はそうではなかった。夫妻が到着しなかったために憂慮すべき事態が生じたのである。そこで別な夫婦は再びチャスコムスの方へ車で探しに引き返したが、見つからないので、またもマイプへもどって来た。夫妻の車も人間も消えてしまったのである。

メキシコ市から電話

ヴィダル夫妻の失踪後四十八時間ほどたってマイプのラパリーニ家（この名を記憶されたい！）の住宅にメキシコ市のアルジェンティン領事館から電話がかかってきた。六千四百キロの彼方である。この電話でヴィダル博士が「こちらは二人とも無事だ」と告げて、ブエノスアイレスのエセイサ国際空港に帰って来る時刻を知らせてきた。

そうこうするうちにヴィダル夫妻が予告通りにエセイサ空港に到着して友人縁者一同に迎えられた。ヴィダル夫人は神経疾患の治療を受けるために空港から民間の診療所へそのまま運ばれて行ったが、ヴィダル博士は驚き呆れている家族にむかって、二人の身にふりかかった驚くべき事件について語ったのである。

ヴィダル博士の談話

博士の話は次のとおりだ。夫妻が失踪した夜にチャスコムスの郊外を離れていたとき、前方に〝濃い霧〟が突然現われて、その瞬間からあと四十八時間というものは全くわけがわからなくなった。二人が正気に返ったときは昼だった。二人を乗せたままの車は見知らぬ小道にとまっている。夫妻は無キズだったが、いずれも首のうしろに痛みがあって、長時間眠ったあとのような感じだった。

驚いて夫妻は外へ出たが、見ると車体の表面は火吹きランプで焼かれたようになっている。しかしエンジンは完全な状態だ。見

なれぬ風景のなかの見知らぬ道路ぞいにドライヴを続けて行くと人々に出会ったので「ここはどこなのか？」と尋ねると返事はみな同じだった。「メキシコだよ」

夫妻の時計は止まっていたが、カレンダーの助けをかりて、二人が四十八時間アルジェンティンから離れていたことがわかった。

メキシコ市のアルジェンティン領事館で

やがて二人はメキシコ市のアルジェンティン領事館に到着したので、そこで身元を確認してもらい、そこからブエノスアイレス州のマイプのラパリーニ家へ電話をかけたのである。

アルジェンティン領事ラファエル・ロペス・ペレグリーニ氏は官憲が徹底的に調査を行なう時期が来るまでは事件を極秘にするようにと要請した。

ヴィダル博士の車プジョー四〇三は科学的な調査を受けるために米国へ送られ、その代償として同じ車種の別な車を受け取るよう手配された。

沈黙のカーテン

きわめて重要なのは、この事件については他の多くの事件と同様にイヤな〝沈黙のカーテン〟がまもなくおろされた事実である。こうして二日後にはマイプの公証人マルティン・ラパリーニが、メキシコ市からかかったといわれる電話などあったおぼえはないし、自分も家族もヴィダル夫妻を全然知らないと新聞記者団に証言した。

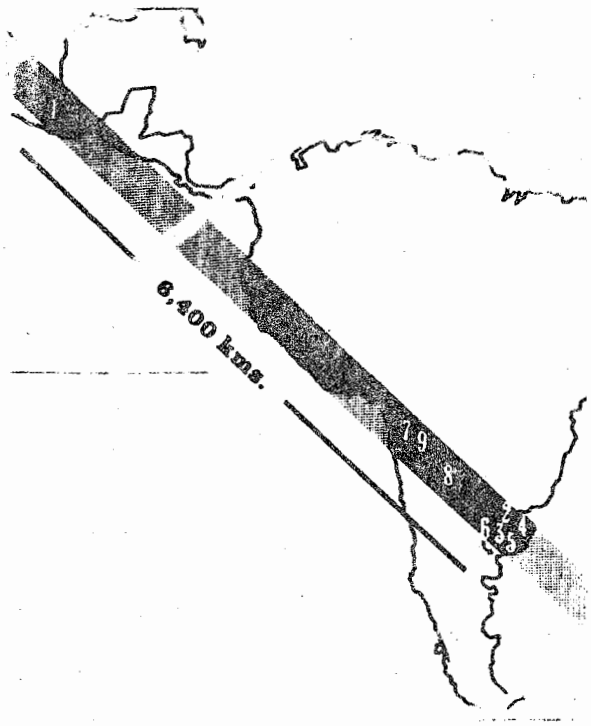
しかし彼は三つの明白な誤りをおかした。というのは、実際にはラパリーニ家はヴィダル家と親類になるのである。第一に、ヘネラルピラン（ブエノスアイレス州の別な町で、マイプから遠くない）に住む彼の妹ラパリーニ・デ・ヘレムール夫人はヴィダル博士の妻と親類である。次に、彼の別な妹でマイプに住むアイダ・ラパリーニは電話の件をすでに友人たちにしゃべっている。三番目に、彼の叔母のマリア・エウラリア・ラパリーニ夫人は、ヴィダル夫妻のメキシコへの瞬間移動の話をすでによく知られている参考人たちに確証している。

最後に、記者団は別な奇妙な、しかも重要な点を見のがさなかった。すなわち公証人の親類縁者の殆どすべてが突然マイプからこっそりと立ち去ったことである。明らかにこれ以上のせんさくを避けるためだ。

更に重要な諸点

結論として別な点をあげることが必要である。(a)ヴィダル夫妻がナゾの失踪をとげた同じ夜、一人の男がマイプ病院へ治療を受けにやって来た。この男の話によると、彼は国道二号線上をドライヴしていたところ、奇妙な霧が前方に出現したが、まもなく上昇して去って行った。あとで本人はからだがひどく震えて気分が悪くなったという。(b)ヴィダル夫妻の事件は一九六一年九月十九日に発生したバーニーとベティー・ビル夫妻の体験の説明に出てくる詳細な点に似ている。(1)ヴィダル博士は車の表面に火吹きラ

ンプで焼かれたような奇妙な跡があったが、ヒル夫妻も車の表面に不思議な輝く円い斑点を認めた。(2)ヴィダル夫妻の時計は止まったが、このことはヒル夫妻にも起こった。(3)ヴィダル夫妻は正気を失った四十八時間中に自分たちがどうなったのか知らない。これは記憶呼びさましの催眠術によって思い出させることができると言いたい。バーニー・ヒル夫妻の場合にこれが施術された。こうしたテストによれば、ヴィダル夫妻から得られる証言はこれまでのなかで最も重大かつ仰天させるようなエピソードの一つをもたらすだろう。



家屋内にある影
出現する不思議な人

チャールズ・ボウエン

或るきわめて異常な非現実的な〝不思議な人間〟に関する〝幽霊〟的性質を帯びた事件をフライイング・ソーサ・レヴュー誌の最近号に載せたかどにより一読者からお叱りを蒙った。

米国ニュージャージー州フレミントンのF・D・マーロウ氏はー氏の手紙はレヴュー誌一九六八年七・八月号の投稿欄に掲載されている—UFOを〝墓地と幽霊屋敷〟に結びつけることによって私がUFO研究界を台なしにしていると詈到している。氏は言う。「これによって今後UFOは決して権威筋や一般人と交わらないだろう。それでわれわれが情報を求めるには霊媒かいわゆる心霊的な洞察力を持つ人に頼らざるを得なくなるだろう(注=皮肉に言ったもの)。—もちろんこんな連中からもたらされる報告は決して確証される性質のものではない」

この読者は急激に飛躍している。一、二の幽霊を含む理由があるかないかを知るために今後の数号のレヴュー誌の誌面を待とうとはしないし、UFOの乗員に関する目撃報告類を子細に研究してきた人々によく知られている特徴が記事中にあるかどうかと報告類に徹底的に目を通すこともしていない。そして、やはり氏の態度は私を驚かさない。なぜなら何かの問題にたいする新しい考え方というものは、或る特殊な仮説に急速に飛びつく人か、またはその問題をすでに解決している人のいずれかにとって必ず矛盾

するからである。

それよりも私を驚かせたのは一九六八年六月二十八日付のマーロウ氏の手紙の中で、氏はUFOはわれわれと交わる可能性があることをほのめかしている点であった。というのは氏の一九六八年三月四日付の公開書簡の中で示したように、UFOはすべて火球であるという点で氏はフィリップ・J・クラス氏の意見と一致しているからである（注＝クラス氏はニューヨークのランダム・ハウス社から〝UFO―正体はわかった〟を出版している）。

歴史というものは全く新奇な現象かまたは革命的な考え方を古くさい主義によって解釈しようとしてきた人々の哀れな記録で満ちている。こうした哀れな人々は真理を探究しようとする人たちに対抗して向けられた嘲笑―または迫害―に通じるわずかな生涯をすごしてきた。嘲笑はわれわれの注意をかくも引きとめるUFO問題にたいして新しい事ではない。さまざまの度合の忍耐力をもって異星人来訪説が正しいことが立証されるのを二十一年間も待ち続けた〝気違い組〟は各自嘲笑の苦痛をなめたし、自分たちが待望するものすべての成就を同じほど長いあいだ待ってきた心霊グループもやはり嘲笑を受けてきた。とにかくUFO現象と心霊現象のあいだに何かの関連を見出そうとする人は嘲笑を覚悟しなければならぬだろう。

結局、こうした考え方の一つ二つは立証されるとみてよいだろう。そして嘲笑は悪口を言う人にはね返るだろう。しかしその日が来るまでは提供されるあらゆる事実または事実と称される報告類を忍耐強く精査する義務がわれわれにあるのだ。インチキだという完全な証拠のない物事を投げ捨ててはならない。

現在益々多くの不思議な〝物〟が目撃されつつあることは否定できない。それらの報告が信じられるものとすれば、UFO事件の多数の目撃者はこれまでよりも〝芸当〟のすべてを見ていることになる。われわれは不思議な人間の出現に関するより詳細な報告を受けつつある。それらはUFOが関係したりしなかったりするが、きわめて非現実的で見たところ無意味なために調査を求めて叫ぶのである。この種の実例のために、或る人々はおそらく地球外の何物かから放たれる放射線の効果によって〝物を見る〟ことができるのかもしれないという説をマックスウェル・ケイドは唱えることになった。このような実例はまたUFO現象と長い時代を通じて発生した心霊現象とのあいだにどこかでつながりがあるという考えを支持するものである。

アストンの或る住宅の事件

十年前に私はわき起こる疑惑の念をもってシンシア・アプルトン夫人の奇妙な報告を読んだことがある―結局これは〝ザ・ヒューマノイズ〟（注＝レヴュー誌が発行した円盤奇談集）に載せることになったが―。

一九五七年十一月十八日にアプルトン夫人はバーミンガム市アストンにある自宅の二階の寝室へ行った。彼女は重苦しさを感じたが、続いてヒューッという音と共にテレビの画面に映るような調子の一人の男の姿が現われるのを見た。彼女は恐ろしくなったが、この〝男〟の彼女にたいする何かの力で静められた。背が高くてきれいなこの〝男〟はからだにぴったりした衣服を着ていた。

相手の唇が動いたが何も聴こえない。やがて彼女は異常な疑惑が心中を流れることに気づいた。相手が別な世界から来た人であり、ティティウムと言ったように聴こえた名の物質を探していることがわかったと彼女は述べている。

彼女によると、相手は平安と調和の世界から来たことを示し、手を用いる或る異常な方法によってドームのついた円盤型の物体の映像を彼女に伝えたという。相手は〝突然いなくなった〟ような工合に消滅した。

この訪問者はその後たびたびアプルトン家へやって来たが、ときどき別な人影を伴っていた。

さてそれ以来私も十才ほど年をとったので、これまでよりも多少は賢明で寛大になったと思う。それで今年二つの新しい事件に出くわしたときも不信感をもって鼻であしらうようなことはしなかった。第一の例は多くの点でアプルトン夫人のそれに似た〝家屋内に現われた不思議な人間〟の英国版であり、第二はアルジェンティンの最新の事件で、他のものよりももっと興味があり、しかも会合が行なわれていた家の付近で一機の円盤が見られたという事実が伴っているものである。

ブリストルでの出現

右の事件の最初のものはブリストル、セントジョージのジェラルド・ロヴェルという読者によって私の注目を引いたものである。以下は彼の報告である。

「目撃者—この場合は主婦—は当分の間匿名を望んでいますのでB夫人ということにしておきます。

ときは一九六五年でしたが正確な日時は不明です。しかし或る木曜日という一例を除けば事件のすべては月曜日に発生しました。

B夫人はいつも一人でおり、普通は台所で忙しく働いています。台所と居間の境のドアーは常にあけてありました。月曜日に突然、居間の中をのぞけという強い命令感が彼女の意識を満たすのです。それでその通りにすると必ず背の高い男の姿に出会います。一、二秒してから彼女が顔をそむけて再び男が立っていた場所へ眼を移すと、その姿はすでに消えているのです。

別な機会にB夫人は台所から出て来て居間へ入りながら見上げるとその男の姿が見えることがあります。いつの場合も相手が出現するところを実際に見たことはなく、また相手が消えてゆくのを見たこともありません。これはいつも視線をそらしたときに起こるからです。

外観は全く立体のからだを持つこの招かれざる客は、ただ彼女を見ながら立っているだけで、発言したり動いたりしようとはしませんでした。B夫人は相手が怒っているのか驚いているのか、それともただ退屈しているのか、相手の顔の表情から探知することはできません。相手は決して笑いませんけれども、B夫人がこの訪問者を恐ろしく感じたことはないと断言しています。

目撃者は正常な申し分のない人で、出来事のすべてを夫に洩らしたのは数ヵ月たってからです。私に詳細を話した際、この男の姿はおそらく昔死んだ—たぶん飛行士—の幽霊ではないかと言っていました。彼女はこの事件を宇宙人の干渉と結びつけてはいま

せん。また、UFO問題に関心を寄せてはいないけれども彼女は〝空飛ぶ円盤〟の話題にオープンマインドを持っていることもわかりました。

B夫人の〝男〟に関する説明は次のとおりです。

『相手は背が高くて、かぶっている大きな円い銀色のヘルメットがなくても身長は六フィート三インチを越えると思う。色白の肌でバラ色の頬をしており、輪郭のととのった顔付きと青い眼と端麗な鼻を持つハンサムであった。大きな広い肩巾で、またヒゲをそる必要は全然ないように思われた。

男は一種のグレイの金属のように見える上下服を着ており、上衣は腰までの長さで、首のところには丸い襟をつけていた。ベルトは巾が約四インチで、服よりも黒っぽい材料で出来ていて、留め金が付いている。ズボンはからだにぴったりしたものではなくて、かなり大きな黒い長グツの中へすそが押し込まれていた。

出現するたびにこの〝来訪者〟はいつも台所のドアーに直面する同じ場所に立っていた。全部で少なくとも六回出現している。この連続出現は始まったときと同様に突然とまった』」

ロヴェル氏は多年この目撃者を知っており、夫人の説明は本人にとって全く真実の体験たる出来事の説明であることを氏は確信していると述べている。更に、B夫人は決して男に話しかけたことはなく、この訪問は彼女の生活を全然変えたとは思えないとロヴェル氏はつけ加えた。彼女はただもうこの事件を忘れたがっており、それで匿名を希望することになったのである。

アルジェンティン、コルドバ付近の出現

残る実例は一九六八年六月十三日から十四日にかけての夜に、ヴィヤカルロスパスの町で寒気の中から出て来てマリア・エラディア・プレッェル嬢を驚かせた〝人間〟の物語に関するものである。

コルドバ州のヴィヤカルロスパスはアルジェンティンの首都ブエノスアイレスの西方八百キロばかりの所にある。私がこの物語の記事掲載に特に負う所があるのは首都のギエルモ・J・ガインサ・パス氏とその友人グループである。またリオデジャネイロの盟友ウォルター・ビューラー博士の助力を忘れてはならない。

ペドロ・プレッェル氏（三九才）はヴィヤカルロスパスの絵のような町でよく知られた人物で、そこに住んでから十年になる。高い教育を受けた人で、東側から町へ入ってくるハイウェイに面した心地よい近代的な施設モーテル・ラ・クェスタの所有者である。プレッェル氏は妻と、陽気で頭のよい娘のマリア・エラディア（一九才）と共にこのモーテルに住んでいる。

問題の寒い冬の夜（注＝アルジェンティンは六月が冬で一月が夏）の十二時五十分頃、彼は町の人通りの絶えた中心地区から家へ歩いていた。すると彼のモーテルから五十メートルの距離の国道二十号線上に、正体不明の、二個の強烈な赤色光を伴った一つの物体を見た。この光は車の尾燈だという印象を与えなかった。この物体は激烈な赤色光線を二つ放射していたからだ。それは瞬間的に目撃されたにすぎなかった。

不思議に思いながらプレッェル氏がモーテルへ急ぎ帰ると、マリアが台所のドアーに近い所で気絶して倒れているのを発見した。蘇生してから娘が語った奇怪な話を聞いて氏の驚きは高まってき

た。

数分前までマリアは若い機械工である彼女の許婚者と話し合っており、その男と別れを告げてから出口の一つまで幾人かの客を送って行った。

訪問者

突然彼女は強い光が玄関を照らすのを見た。変に思いながら—というのは燈火はすべて消したことを思い出したから—調べに行くと、青色に輝くウロコのついた一種の〝潜水服〟を着た身長約二メートルの人間と直面していた。相手は金髪で、左の掌に一種の青色の球を持っていて、それを動かし続けていた。いろいろの説明によると、人間の手足の先端から光が放たれていたという。

マリアは、相手の右手は〝大きな輪〟を持っていて、その輪は手を半分覆う籠手の形をしていたと言う。別な説明によるとこの輪は手を半分覆っていて、第四番目の指にしばりつけられていたとも語る。

訪問者は絶えず右手を上下に動かしていた。手を上へ上げるたびにマリアはからだからすべての力が抜けてゆくようなけん怠感に襲われた。どうやらこれは相手の指先から出る光が彼女に向けられたために起こるらしい。相手が手を下にすると彼女の感覚は正常に復した。

これは別として、侵入者は如何なる攻撃的な意図をも示さなかった。そしてマリアの相手に対する印象は全体に善良で親切だということであった。相手は出現のあいだずっと微笑していたからだ。唇を動かさなかったが相手はマリアに何かを伝えようとしているようだった。不可解な言葉をブツブツつぶやくのが聴こえたからである。それは彼女に中国語か日本語を思い出させるような言葉だった。

数分後訪問者は完全に無言のままゆっくりと確実な足どりで歩きだして、開いていた横の出口へ行き、そこを通り抜けた。ドアーはだれも触れないのにひとりでにしまったが、その瞬間にマリアは意識を失い、あとで父親がそばへ来てから正気づいたのである。

娘の話を聞いてひどく身震いしたプレッェル氏はその事件を警察へ知らせた。公式報告書を出してから警察は調査を開始すると声明した。

その後新聞記者はマリアが極端な神経過敏で弱っており、泣く発作が起こりやすいことを発見した。これは相手の身振り動作によって再びやって来ると解釈したからである。

プレッェル家はヴィヤカルロスパスの町で大いに尊敬されている。

推論

家屋内に現われた不思議な人間の以上二つの新しい実例は、いずれも一部分は一九五七年のアプルトン夫人の事件と似ており、いずれも〝潜水夫〟または〝飛行士〟の着る服に似た服を着ている。

たしかにこの円盤問題の最も重要な部分はＵＦＯ着陸と乗員、

または歩くものに関する報告である。とにかく全体がまことにきわめて複雑だ。というのは報告類は見たところ図体のずんぐりした形の小人の〝乗員たち〟（これらは一体に地球の人間に無関心で、ときには敵意を示す）から、〝巨人〟やウェストヴァージニアの〝ガ人間〟または〝鳥〟やフラットウッズの怪物の例の如きこの世のものとも思えぬ生物に至っているからである。こうした両極端の中間になるものは普通の大きさかそれより少し大きい体格で、表面は友好的な、ときとして影のような、しばしば金髪の人物である。

正直に言って私はこれらの正体を知っているとは言えないが、〝空間中の戦い〟の話がある旨をかつてレヴュー誌の記事で述べたことを思い出す。それは一九六三年のことだが、或る意味では空間に依然として〝戦い〟があることを考えねばならないと思う。ただし必ずしも宇宙空間というわけではない。この戦いというのはいわゆる古くからある善と悪との戦いではないだろうか。

すでに述べたように、C・マクスウェル・ケイド氏は或る仮説的な実体が〝受容的な〟人々の心中に幻覚的効果を起こさせる可能性があるとほのめかしている。ケイド氏はこの推論を地球外の源泉に起因するとした。私としては、異なる次元間の、この世界と並行してはいるけれども異なる時間の流れを持つ世界からこの事が起こるのではないかと思う。或る実体（悪か？）がこの世界に〝洩れ出て来る〟方法を発見したのだろうか？　このことを知った別な実体（善？）がわれわれに警告しようとしているのだろうか？　彼らの映像が彼らの世界からやって来るのは放射によるものか、反射によるものか、それとも機械の飛行によって助長される何かの方法によるものなのか？　機械を用いるからこそ、いわゆるUFOによって残されたといわれる跡や、輪型のミゾや、〝鳥の巣型の跡〟が残るのか？　その機械がメッセージを伝える放射装置を使用しているのだろうか（マリア・プレッェルの例がそうであったかもしれないように）？　これらの実体は固体に物質化することができるのか、それとも彼らは人間の心の中に映像または幻覚像として残るのか、それともこの両方が可能なのか？　これはUFO現象と心霊現象の両方の背後にひそむことなのか？

彼らは別な次元の世界から来るのか、それともわれわれと同じ次元の別な惑星から来るのか、いずれにしてもどこかのだれかが地球へ到達しようとしているらしい。たぶん彼らはわれわれに警告しようとさえしているのかもしれない。しかしコンタクティーがしばしば主張するようなこれらの警告は必ずしもわれわれには必要ではなく、逆に、来訪して来ても地球人の福祉に全然関係がない別な世界の人間に向けられるべきである。

このことが前記の奇怪な家宅侵入の背後にある意味なのか？　これがコンタクトの意味なのか？

思うに、ここに一、二の〝幽霊〟の研究から始めることの非常によい理由がある。特に幽霊の出現がUFO報告に何かの関係があるというヒントが存在する場合はなおさらである。とにかくUFO問題と関連があると思われる場合、どんなにバカらしく見えようとも、何事をも拒絶してはならないということを私は極力強調するものである。

フランスの奇怪な物語

悪魔との出合い

ジョエル・ムスナール
クロード・パヴィ

石垣と樹木のカーテンで仕切られた数々の牧草地を背景にしたカンタル高原の或る丘の上に小さな村がある。サンフルールの東南東二十キロの地点にあるキュサク村だ。一九六七年八月二十九日の午前十時三十分、D五七路のそばの草原の中に十頭ばかりの乳牛がフランソワ・ドゥルプーシュ（十三才）とその妹アンマリー（九才）の付添いのもとに草を食っており、メドールという犬も一緒にいた。天気はよく、空は晴れて、そよ風が西の方から吹いて来る。

牛たちが低い石垣を越えようとして動いたので、引きもどそうとしてフランソワが起き上がって、あたりを見廻したとき、道路のむこう側に四人の子供らしい姿が見えた。それは四十メートルばかり離れた垣のうしろにいる。どうもよくわからないのでもっとはっきり見ようと思ってフランソワは数個の石の上に上がった。すると〝小人たち〟の近くに大きな球体があって、その半分は垣根にかくれているのが眼についた。あまり強烈に光るのでそれを見ると眼が痛くなるほどだ。

小人たちの一人がかがみ込んで土をいじっているらしく、日光を反射している物（フランソワは鏡のようだったという）を片手に持つ他の一人が両手を振っており、見たところ仲間に合図をしているようだ。

そこでフランソワは呼びかけた。「ボクと遊ぶために来たのかい？」この瞬間、二人の子供に関心がなかったように見えた小人たちは自分らが観察されていることに気付いた。最初の一人が垂直に飛び上がって球体の頂上へ頭から突っ込んだ。二人目も同じようにして続き、三番目も飛び上がって同様にした。四番目も飛び上がったが、球体にとび込む前に再度降りて地面から何かをひろい上げるように見えた（例の鏡だろうとフランソワは思っている）。それからその小人は再び飛び上がって球体に追いついたが、その間球体は小さな螺旋形を描きながら上昇を始めていて、空中に十五メートルばかり浮かんでいた。小人はやがて他の者たちと同じように内部へ姿を消した。上昇中に球体は柔らかな突き刺すようなヒューッという音をたてたが、それは子供たちが感じなかったそよ風の音とまじっていた。

続いて球体は再度数回旋回しながら上昇を続けたが、その間球体が放つ光の強度がかなり増大した。すると音がやんで北西の方向へ全速力で飛び去った。同時に硫黄のにおいが漂い始めて子供たちの鼻を打った。牛たちは鳴きだしてフランソワとアンマリーの牛たちの近くへ集まって来た。

犬のメドールは物体にむかってほえたてて、あとへついて行こうとした。子供たちは物体が消え去るまでは見なかった。驚きあわてた牛たちをなだめねばならなかったからだ。そしていつもより三十分早く牛たちをつれて帰った。

物体に関する詳細な点は乏しい。それは完全な球体で、径が約二メートル、きわめて強烈に輝く銀色の光を放ち、眼もくらむばかりだった。眼鏡をかけているフランソワの眼は弱いにちがいな

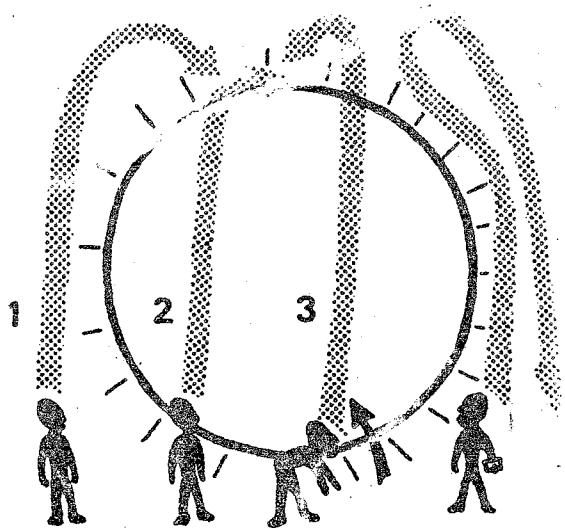
く、物体を見た後に十五分間眼から涙が出たが、その後数日間毎朝起床時にも涙が出た。眼鏡をかけていない妹は何事もなかった。

球体そのものには何の付属物も認められなかった。完全になめらかで、シルシや穴もない。どうやら小人たちは球体の壁を突き抜けたらしい。たった一つ眼についた物がある。これは目撃した子供たちの話のくい違いの一つだが、アンマリーによると、球体の下部に三、四本のまっすぐな脚からなる着陸装置があり、各脚の先には径十センチの丸い〝クツ〟がはかせてあったという。子供たちには飛行中の機体の下部にはもはや何も見えなかった。アンマリーは脚が球体中に引っ込むところを見ていない。脚は一分間ばかり見えたが、次の瞬間にはもうなかった。これは次のように考えてよいかもしれない。球体が上昇して正視できないほどに光の輝度が増大したので、物体の付属物がこのまばゆい光によって消されてしまい、そのために離陸の瞬間に弱い眼のフランソワには眼が見えなかったのだと。

球体が螺旋形で上昇し始めるにつれて硫黄のにおいがひろがった。軽い西風が物体から子供たちの方へ吹いてくる。物体が離れるとすぐに牛たちが鳴きだした。よく考えると、オゾンが硫黄と（正確には硫黄ガス）よく似たにおいを有すること、更にオゾンのにおいが多くのUFO着陸事件で報告されている事実に気付かれるだろう。

小人たちに関する細部の説明は豊富で興味深い。彼らは一メートルないし一、二メートルの身長で、みんなが同じ高さではない。第1号と第2号（図を参照）は最も小さく、一番高いのは第4号の〝鏡〟を持っている小人である。彼らは〝まっ黒〟だったが、輝くような外観を呈しており、それをフランソワは絹の輝きにたとえている。その黒い色が小人の皮膚の色なのか、何かの保護服の色なのかは子供たちにはよくわからない。衣服（だとすれば）と、むき出しの顔とを区別する線が見えなかったからだ。もし何らかの保護服だとすれば完全にからだにぴったりしたものである。

手足の均衡はわれわれの標準に全く合致しないものであった。腕はやや長くて細い。子供たちは小人の手首らしきものを認め得



なかったし、足は短くて細かった。手は見えなかったが、第4号の足を観察できて、それを〝水かきのついた足〟と言っている。これはおそらく何かの足覆いのためなのだろう。頭部は胴体に適切な正常な釣合を保っているように見えたが、頭蓋はとがっていて、アゴもきわめて長かった。鼻もとがっていて、ここに子供たちの第二のくい違いがある。アンマリーだけが小人第4号が球体に飛び込もうとして地を離れて横顔を見せたときにこの鼻を見た。これは瞬間的な目撃であったためにフランソワには見えなかったと考えてよいだろう。最後のきわめて興味ある点は小人たちがはやしていたヒゲである。それは頭の両側にはえており、アゴの下にも少しあった。眼や鼻を見分けることはできなかった。

小人たちは背中に何の装置もつけていなかったが、全く楽々と急速に飛び上がった。これはジャン・グービル氏が反発力場について書いた記事中に述べられたものに似た装置の小型か（注＝フェノメヌ・スパシャオ誌第十一号中の記事）、それともその飛び上がり現象は一定の信号にもとづいた例の光る物によってできるのか、あるいは球体内部の第五人目の乗員の動作によると考えられる。

われわれはだれにも事前の予告をせずに調査に行った。そのため二人の子供は待っていたわけではないので、話のリハーサルをやっていたとは考えられない。われわれはまず警察署へ行き、そこでていねいに迎えられてこちらでつかんでいた基本的事実の確証を与えられた。この事件については、ラジオ・リュクサンブールが、事件の翌日に行なわれた同放送の記者と子供たちの父親との対談の記録を親切に送ってくれて知ったものであり、また一九六七年九月二日及び三日付のパリ・ジュール紙に掲載された記事でわかったのである。目撃事件の基本的輪郭の確証において警察が断言するところによると、事件の日の午後四時に現場へ来た調査官たちは硫黄のにおいがすることをたしかめたという。しかも警察や調査官は最初からこの事件を重視していた。

続いてわれわれはキュサクへ行き、そこで小さなアンマリーとその母親、マリーの弟のアンドレたちを見つけて、歓迎を受けた。こちらは二人だけで、交互にのべつまくなしに質問を発して、ときどき簡単な言葉で同じ質問にもどったりしたが、これは相手の話に矛盾を発見しようとしたためである。アンマリーは内気な少女だが、その話には全然矛盾はなかった。この質問戦のあと彼女は、他の兄のレイモンドと一緒に畑で働いていたフランソワを探しにわれわれを案内してくれた。そしてフランソワを家へつれて帰って、アンマリーの場合と同様の質問戦を展開したが、その話にも全然矛盾はなかった。今度は家と事件の現場の両方で二人を相手に尋問し、もっと特殊な質問を発したが、二人のあいだに共謀的な様子は全く見られなかった。子供たちはこちらの質問に当惑したようなふうでもない。つまり尋問された詳細な状況を実際に見たか見なかったかということである。たとえばフランソワは次のように言った。「最初の日からアンマリーは球体の下に脚があるのを見たと言っているけど、ボクは何も見なかったんだ。だから何も言えないよ！」ところで、この点についてはフランソワは妹が垣根の木の枝を〝脚〟と感違いしたと思っているのだ。

両親から聞いてわかったことだが、アンマリーは事件のあと二夜は眠れなかったので、両親がこの子を中にして寝てやる必要が

あったという。フランソワも最初の日は眠れなかった。納屋の中で干草を取り除いていたキュサクの住人ドゥルシェ氏は球体が上昇したときにヒューッという音を聴いていた。両親の話によると、子供たちが牛をつれて帰ったとき泣いていたという（子供たちがこのことを話さなかったのはおそらく恥ずかしかったからだろう）。

以上の両親の話はすべて子供たちのことを思って申し合わせたものだろう。ところが一方、子供たちがこの複雑な物語を創作したものとすれば、一般UFO現象の内容や多数の人が目撃したものと見事に一致しているので（ただしわれわれが知る限りUFO事件にしては初耳の硫黄のにおいは別である）、この事件を多少とも典型的な目撃事件の分野に入れてよいし、またフランソワとアンマリーがUFO問題の専門刊行物を読んだとみてもよいだろう。たしかに次第に多くの人がUFOに関心を持つけれども、UFO専門の刊行物の普及はまだきわめて微々たるものなので、フランスの最も人口の希薄な地域の一つであるカンタル県の一農夫の子供がこうした刊行物を読んで目撃談の詳細な知識を仕込んだとは到抵考えられないことである。

両親の話によればフランソワは四年生でよく働く子だという。学校で何を習っているかと聞かれてフランス名詩撰、ジョルジュ・サンド、シャトーブリアン等をあげたが、これはおそらくカリキュラムの一部なのだろう。一方、この子はあのような物語をでっちあげるほどの想像力を持っているとは思えなかった。事件当時に感じた恐怖は別として、目撃物の重要性や意義を認識しているとは思えない。ところで、ドゥルシェ氏が聴いたヒューッという音と警察が確証した持続性の硫黄のにおいの説明が残っている。

以上の事柄のすべては、尋問によって得た感じ、すなわち熱烈に信じられているきわめて重大な事件にわれわれが出くわしたという感じを強めるばかりであった。しかもその事件の重大さと意義は如何に強調してもしすぎることはない。これほど多くの状況証拠を含み、またこれほど多くの難問を—その殆どはすでによく知られている難問だが—を提示した明瞭な事件についてわれわれは殆ど聞いたことがない。しかもこの事件に関しては、哀れ、われわれは推測の域を一歩も出ないのだ。ここでも、相手が子供といえども故意にコンタクトを避けたこと、球体の推進力の神秘、人間らしき形をした者—しかもそれらの少々不穏な出現等が見られるのである。この小人たちの出発地点と目的に関する疑問は未解決のままである。

チャールズ・ボウエン氏注＝この記事に関するルネ・フーエーレ（注＝フランスの研究家）の解釈は次の二点を想起させる。

小人たちの乗船のいささか風変りなやり方について、この球体はたぶん固体でイオン化された輝くガスの外被で包まれていたために、その強烈な輝きによって入口が見えなかったのかもしれないこと。これは一九五九年六月二十一日にパプアのジル神父と生徒たちがボイアナイで、輝く外被体が消滅したときに中の本体を見たこと。第二に、一九六五年ヴァレンソルで目撃された物体の乗員たちは何の装置もなしにビンの中の泡のように空中を上下していたことなどである。

次頁の写真は現場における二人の子供とクロード・パヴィ氏。

UFO探知機の作り方

コリン・マッカーシー

この探知機はコンパス針型のものとは異なる。コンパス針型は機械的な作動に頼らず、惰性を生じ、そのため全体の感度が低下する。そこでコンパス針のかわりに軟鉄のコイルシンに一万オームのコイルを巻き、このコイルが約四十デシベルの利得のある五石トランジスターのアンプの高インピーダンス入力に連結される。このアンプの出力負荷は高速五十オーム継電器で、その接触が作動中に継電器を自動的に"ON"にするとともに、ブザーを鳴らすように電流を流すのである。

作動原理

小さなパルス磁場がピックアップ・コイルを切るとき微弱な電圧を誘起する。この電圧が数千倍に増大して継電器に流れて充分な電流が発生し、そのため継電器が閉じてブザーを鳴らすのである。この探知機をセットし直すにはブレーキの役目をする接触ボタンを連結させる。これを押すと継電器への供給を開回路にし、回路は受信状態に返り、ブザーは停止する。

効果

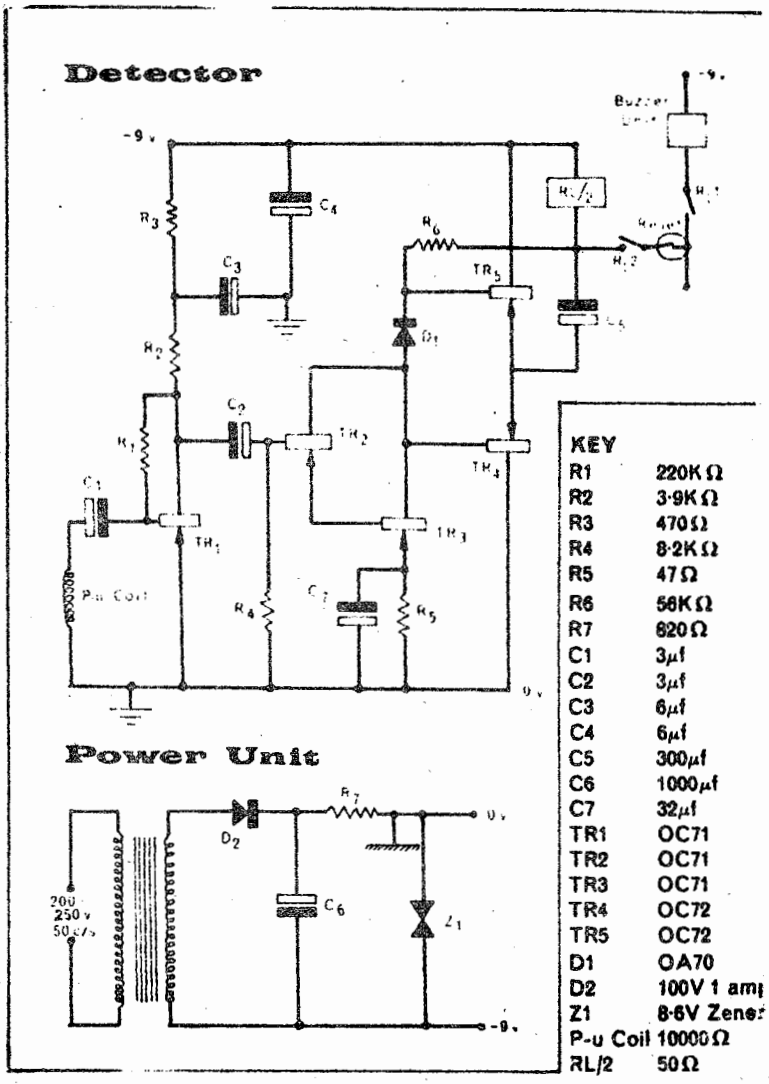
テストの結果、秒速一センチで動く約一万ガウスの磁場の強さ

が探知機を"ON"にするのに充分であることがわかっている。もし推定されるUFOのパルス磁場に関してこれまで行なわれてきた測定が正しいものとすれば、探知機は小型円盤ならそれから斜め範囲で一ないし三マイル、大型宇宙船ならば五ないし十マイル内でブザーが鳴るはずである。

私宛の二、三の報告によれば、探知機が作動して右の範囲内にUFOが見られたという。

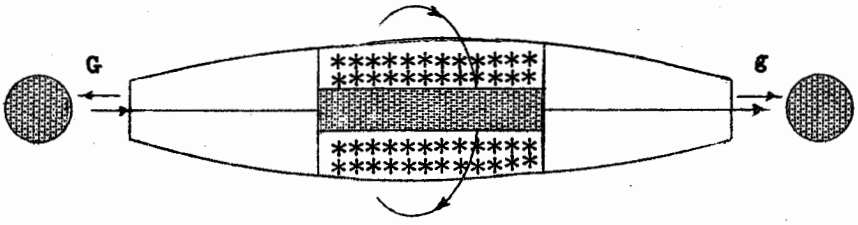
この探知機は気圧や気温の普通の変化に影響を受けないが、大きな温度の変化によってトランジスターがこわれることがある。付近を通る自動車の電気的干渉として、もしコイルが自動車の電気系統から六インチないし一フット以内にない限りブザーは作動しない。上空を通過する飛行機や人工衛星が探知機に影響を与えることはない。

この装置の感度をテストするにはピックアップ・コイルを地球の磁場を通して急速に回転させるか動かせばよい。ブザーが鳴るはずである。別なテストとしては小さな磁石をコイルから約三ないし六インチの所で動かすと鳴りだす。



参 考 文 献

1. 清家新一、日本物理学第21年会講演集、第5分冊、348頁。
2. (A) 同上 (B) 清家新一、第16回応用力学連合会(1966年)第2分冊、11頁。(C)清家新一、日本物理学1966年秋の年会講演集第1分冊143頁。
3.4. =2. (B)
5. 清家新一、日本物理学1965年秋の年会講演集、第2分冊、339頁。
6. (A) 江夏弘、Progress of Theoretical Physics 30 (1963) 236頁。
(B) V. Vock, Zeitschrift fur Physik 98 (1935) 145頁。
(C) A. Z. Dolginov、ソ連実験及び物理学会誌、30 №4 (1956) 746頁。
7. (A) L. Brillouin、Proceedings of National Academy of Sciences、53巻 №3 (1965) 475頁。(B)
(B) R. Lucas、C. R. Acad. Sc. Paris、262巻 (1966) 853頁。
8. 大島康次郎、自動制御、共立出版(1957)13頁。
9. =2. (B)
10. 一松信、数学公式集、岩波書店(1964) 50頁。
11. =1. 2. 及び清家新一、1965年秋の物理学年会第2分冊、339頁。
13. 富山小太郎、相対性理論、岩波書店(1956) 46頁。



絶賛刊行中！

死と空間を超えて

ジョージ・アダムスキー

A5判／186ページ
500円・〒65円

久保田八郎 訳編

☆ジョージ・アダムスキーが"空飛ぶ円盤の真相"刊行後、1965年4月に他界するまで定期的に発表し続けた体験記や論説のうち本誌に掲載したものすべてをあらためて一冊に収録した貴重な書。

☆金星旅行記・土星旅行記を含む数十篇の記事を第1部とし、第2部にはアダムスキーから編者宛の未発表書簡多数を掲載。アダムスキー直接執筆の文献邦訳版としてはこれが最後。

☆編集に際しては訳文を更訂して発表年代順に集録。本格的活版印刷(タイプ印刷にあらず)。本文8ポ。上質紙使用。

☆少数限定版につき早目にご注文のほどを。なるべく振替をご利用下さい(久保田八郎個人宛)。 2冊入手して1冊を知人に贈るもよく、2冊で送料115円、3冊以上の一括注文は小包便となり、第1地帯120円、第2地帯160円、第3地帯230円。

により、状態運動量の最終成長値は

$$\frac{dP}{dt}(\infty)=\lim_{s\to 0}\frac{sP(s)}{sP^{0}(s)}=\mu G\left(\frac{-bG}{S}+\frac{\sqrt{b^2+\mu^2C^2}}{\mu C}\right),\qquad(3-2)$$

であり、かつエネルギーのそれは

$$\frac{dW}{d\tau}=-G\left(-b+\frac{S}{G}\right),\qquad(3-3)$$

となる。状態運動量の第0超平面の最終値は、第3超平面の初期値に他ならぬ事を考慮した。その時相互インダクタンスLで結ばれる誘導体に沿って誘起されるポテンシアルは

$$\psi=-(\delta L\mu G/C^2)\left(-bG/S+\frac{\sqrt{b^2+\mu^2C^2}}{\mu C}\right)P(\beta),\qquad(3-4)$$

であり、推力は（3—2）及び（3—3）から

$$\frac{dW}{dZ}=\frac{G}{c}\left(b-\frac{S}{G}\right)\ (0<b),\qquad(3-5)$$

となる。

§4. 隣接の遊星への最短航行。　スピンに関する右ネジの法則〔文献(9)参照〕により、状態運動量の沿直成分の成長は、双曲面対称の反重力に他ならぬ。この事は、（3—5）式にもはっきり表れている。重力の仕事は反発力を与え、一方負の仕事は引力を与える。近傍の遊星の重力は負の仕事を与える。例えば、火星は宇宙船を吸引し、地球重力には反発される。この火星の重力gをも考慮して方程式（3—5）は、

$$\frac{dW}{dZ}=\frac{G+g}{C}\left(b-\frac{S}{g+G}\right),\qquad(3-6)$$

となる。多量の誘電及び磁性体の運動量種子と、どちらかと言えば弱い共鳴磁場を用いると、第2項は第1項に対して無視出来て、（3—6）は更に、

$$\frac{dW}{dZ}=\frac{G+g}{C}b,\qquad(3-7)$$

となる。

最後に（3—7）を利用して、近傍の遊星への航行時間を計算しよう。但し

$$\mathbb{M}\frac{d^2Z}{dT^2}=\frac{(G+g)b}{C}\cdot\frac{\beta}{\sqrt{\beta^2-1}}$$

の如く、超光速航行にも亜光速航行にも共通な、第0及び第3超平面の境界点に置いた時計を用いる。但し、$\mathbb{M}$及びβは、宇宙船の全質量及び　$\beta=1+(\varphi+\psi)/C^2$　であり、更にφ及びψは、地球の重力ポテンシアル及び（標的の）近傍遊星のそれである。航行時間は

$$T=\frac{2a}{C}\sqrt{\frac{\mathbb{M}}{\mu}}\cdot\frac{1}{\sqrt{2k^2-1}}\left\{(1-k^2)K\left(k,\frac{\pi}{2}-\psi_1\right)+E\left(k,\frac{\pi}{2}-\psi_1\right)\right\}$$

（3—9）で定まる。ここで、a，k及びψ_1は、航行距離、楕円積分の母数

$k^2=1/(1+R/a)$及び　$\psi_1=\sin^{-1}2\sqrt{R/a}$である。2Rは地球の直径。航行距離は（地球の半径に比較して）非常に大きいので、（3—9）の1項は楕円積分表に載っていない。また楕円積分の上限は殆ど$\pi/2$なので、ヤコービの公式を用いるのが良い。最後に、幾つかの近傍遊星への航行時間を表示する。

標的遊星	距離	所要時間
月	$3,8\times10^5$ km	3秒
火星・金星	$2,0\times10^8$ km	22分
冥王星	$57,6\times10^8$ km	3日15時間

（29頁へ）

但し、$K^2=\omega_1^2+\Omega_2^2+\omega_2^2$, $\omega_1=\delta H_1$, $\Omega_2=\delta E_1$ 及び $\omega_2=\delta H_0+\omega$ であり、境界条件は、

$$P^0(0)=\mu C\left(1+\frac{\varphi}{C^2}\right)$$

他の$P_j(0)=0$とした。φは地球の重力ポテンシアルである。即ち、アインシュタインの関係式（$P^0=mC$, $E=mC^2$）に、重力ポテンシアルの修正〔文献(7)参照〕を考慮に入れた。ラプラス変換の最終値定理〔文献(8)参照〕によって、

$$\beta(\infty)=\lim_{s\to 0}\frac{sP^3(0)}{sP^0(0)}=\frac{H_1}{E_1}=1, \qquad (2-8)$$

を、ゼロ電磁場$E_1=H_1$に対して、共鳴条件$\omega_3=0$のもとに得る。βは、規格化速度（V/C）の第3成分である。L. Brillouin〔文献(7)参照〕の上述の修正のもとに、光速をその等価値$C_S=C(1+\varphi/C^2)$で、最終ヴェクトル運動量は、

$$P^3(\infty)=\mu C(1+\varphi/C^2)/\sqrt{(1+\varphi/C^2)^2-1}, \qquad (2-10)$$

ここでもう一つ考慮せねばならないのは、フェロクスプレーナとチタン酸バリウムのボルツマン統計である。分子の4元運動量の定位は、第0超平面上の合成された軸性角運動量及び極性角運動量の定位で置き変えられる。分子の状態確率Zは、

$$Z=\frac{\int_0^\pi I_0[a(\cos\psi+1)]I_0[b(\cos\psi+1)]\cos\psi\sin\psi d\psi}{\int_0^\pi I_0[a(\cos\psi+1)]I_0[b(\cos\psi+1)]\sin\psi d\psi}$$

$$=ab\left[\frac{1}{3!}-\frac{(a^2+b^2)}{3!(3\cdot 5)}+\frac{16(a^2+b^2)^2}{3\cdot 7!}+\cdots\right], \qquad (2-11)$$

で与えられる。但し、$a=I_0|H|/KT$、（2—12）　及び$b=P_0|E|KT$は、ボルツマン因子で、積分中の$I_0(Z)$は、最低次の変形ベッセル函数である。（2—12）のI_0及びP_0は、分子の軸性及び極性角運動量振巾のδ倍である。残念ながら、上記の確率は、可能な最大の電磁場に対しても、そのままでは非常に小さい。そこで、locking magnetic fieldを考える。全運動量方程式〔文献(11)参照〕から、半径aの円周上の軸性角運動量素片は、

$\varkappa_S=P^3(\tau)Z/a$、　（2—14）である。但し、$P^3(\tau)$は（内部）ヴェクトル運動量の第3成分である。ドーナツ状磁場h_0を与えた際のボルツマン因子は、

$\beta=\delta\varkappa_S h_0/KT$,　（2—15）　ここに$h_0$はドーナツ状磁場の円周成分である。（内部）ヴェクトル運動量の第3成分の定位は、　$P^3(\tau)=P_3^0(\tau)L(\beta)$、（2—16）で評価できる。$P_3(\tau)$は、$h_0$が無限大の際の$P^3(\tau)$の値である。$L(\beta)$は所謂ランジュヴァン函数である。かくして、（2—14）を（2—16）により等価質量で修正してランジュヴァン函数の極限に於て、後述のフィードバックを適用して、再び最初の値を得る。

§3. 第3超平面の超力学。　前章では、内速度が光速度を越え、これに応じて計時の仕方を変えねばならぬことをみた。内速度が光速に達した瞬間、フェロクスプレーナとチタン酸バリウムは、第0超平面の存在ではなくなり、

$d\tau=\frac{dZ}{C}\sqrt{1-\left(\frac{C}{V}\right)^2}$ の計時による第3超平面の歴史が始る。ここに、第3超平面の法線は、Z軸である事を利用した。この超光速計時により、測地線の方程式は

$$\frac{dP}{d\tau}+\Omega P^0=0,\quad \frac{dP^0}{d\tau}+\Omega P+\frac{S}{\mu C^2}P^0=0, \qquad (3-1)$$

$\Omega=G/C$で、Sは電磁場の輻射である。再び新しい計時による最終値定理〔文献(8)参照〕

（右頁へ）

量子流体宇宙船

茨城大学　清家新一

§1. 序　論　　宇宙技術の顕著な発展により、ロケットはどちらかと言えば旧式になって来た。そこで超相対性理論の面から、確率雲をエネルギー源とする超光速宇宙船を定式化しよう。

§2. 状態4元運動量の量子電磁力学的制御とフェロクスプレーナ及びチタン酸バリウムのボルツマン統計的制御　　粒子の4元運動量$P=(p,\ iq)$は、参考文献(1)にも述べたように、ハイゼンベルグの方程式成立のもとに、方程式

$$\frac{dp}{d\tau}=\alpha(p\times H-qE),$$

$$\frac{dq}{d\tau}=\alpha p\cdot E, \qquad (2-1)$$

に、また、状態角運動量は、ジャイロ電磁気方程式

$$\frac{d\text{Ж}}{d\tau}=\alpha(\text{Ж}\times H-\text{Я}\times E),$$

$$\frac{d\text{Я}}{d\tau}=\alpha(\text{Ж}\times E+\text{Я}\times H), \qquad (2-2)$$

に従う。ここで、それぞれE及びHは、電磁場　$H=(H_1\cos\omega\tau,\ H_1\sin\omega\tau,\ 0)$, $E=(-E_1\sin\omega\tau,\ E_1\cos\omega\tau,\ 0)$、　p, q, α, Ж及びЯはヴェクトル状態運動量、状態エネルギー、電磁相互作用定数、軸性スピン及び極性スピンである。時間τは、合成状態運動量の重心で計時する。合成状態運動量は、等価相互作用定数δ及び換算質量μを用いて、方程式(2—1)及び(2—2)に従う。この方法をくり返して、電子x個、陽子y個及び中性子z個の系に適用して、更に電磁場相互作用定数ξ、原子x個の系に適用し、最後に互いに隣接する時空に存在するフェロクスプレーナ及びチタン酸バリウムの2系に適用することにより換算質量μは、

$$\mu=\frac{M_1M_2}{2(M_1+M_2)}\cdot\frac{1}{(X\nu_1+Y\nu_2+\cdots)}\cdot\frac{(X|Y_1|+Y|Y_2|+\cdots)}{(X|Y_1|\xi+Y|Y_2|\eta+\cdots)}$$

$$\times(X\mu_1\xi+Y\mu_2\eta+\cdots)$$

＋(チタン酸バリウムの寄与)、(2—4)　ここで、$X\nu_1+Y\nu_2+\cdots$, $|Yj|$及びmjはそれぞれフェロクスプレーナ分子の質量、主量子数Njに関して$|Yj|=\sqrt{Nj^2-1}\,\hbar$ (2—5)の如く定義される原子の状態角運動量の振巾及び電子、陽子及び中性子の質量であり、相互作用定数δは、

$$\delta=\left(I\cdot\frac{|Y_1|\xi+|Y_2|\eta+\cdots}{|Y_1|+|Y_2|+\cdots}+P\cdot\frac{|\acute{Y}_1|\xi+|\acute{Y}_2|\eta+\cdots}{|\acute{Y}_1|+|\acute{Y}_2|+\cdots}\right)\frac{1}{I+P}$$

(2—6)となる。ここにI及びPは、フェロクスプレーナの全磁化及びチタン酸バリウムの全分極であり、プライムはチタン酸バリウムの添字である。電子及び他の素粒子に対してディラックのスピノル〔文献(13)参照〕を用いた。この2個の相対論的物理量を用いて、方程式(2—1)は、次の様に解ける〔上記の電磁場に対して〕

$$P^1(\tau)=-\frac{\mu c\Omega_2}{K}\sin K\tau\left(1+\frac{\varphi}{C^2}\right)$$

$$P^2(\tau)=\frac{\mu C\omega_2\Omega_2}{K^2}\left(1+\frac{\varphi}{C^2}\right)(1-\cos K\tau),$$

$$P^3(\tau)=-\frac{\mu C\omega_1\Omega_2}{K^2}\left(1+\frac{\varphi}{C^2}\right)(1-\cos K\tau),$$

$$P^0(\tau)=-\frac{\mu C\left(1+\frac{\varphi}{C^2}\right)}{K^2}(\omega_1^2+\Omega_1^2\cos K\tau), \qquad (2-7)$$

(31頁へ続く)

編集後記

◎種々の事情により刊行が遅れて申訳ありません。今年こそは順調に続けたいものと新たな意欲に燃えております。ご支援をお願い致します。

◎〝量子流体宇宙船〟の清家（せいけ）新一氏（三二才）は東大数物系大学院出の新進物理学者、茨城大学助手で、アダムスキーに深い関心を持たれる方です。氏によれば、本誌掲載の理論がいわゆるUFOの推進エンジンと同一型式のものだろうとのことで、これは六八年一月の第十一回宇宙科学技術講演会にて発表されました。要約すればチタン酸バリウムとフェライトを量子種子として自励振動を起こす重力場推進方式で、氏はこれらの材料でUFOの模型を製作し、目下パワーコイルに電流を流して結果を調べているそうです。

◎本号中大部分の記事はフライイング・ソーサー・レヴュー誌からとりました。他にもぼう大な資料がありますが掲載不可能です。

◎六八年六月二十八日付デンマークGAPのハンス・ペテルセンからの連絡で、その年の三月頃会員の一デンマーク婦人がローマカトリックの一司教から、アダムスキーのヴァティカン事件、特に法王より金メダルを与えられた件が真実であることを確証されたということです。

◎九大の塩谷博士からたびたび米国の貴重なUFO資料をいただき、深謝しております。それには「五百万人の米国人が円盤を目撃している」とあります。

◎本誌第36号中の〝空想か真実か〟に出てくる奇怪な人間について本会某幹部は「これは人間の感官に相当する化学物質で構成された一種の自動擬人であろう」と推測していますが、多くのロボット的行動を示す〝小人〟についても充分考えられることです。

◎文久書林（〝テレパシー〟の発行所）が左記へ移転しました。
東京都文京区白山一丁目二九―一二、日本税経ビル二階
なお〝テレパシー〟は現在も増刷刊行中です（二五〇円）。

◎〝死と空間を超えて〟はおかげ様で絶賛を博し、多数の方から賛辞が寄せられました。未入手の方は早目にお申込下さい。

◎本誌旧号は次のものが編者方にあります。33、34、35号（以上各一三〇円）、36号（一五〇円）、送料各35円。一括注文の場合は送料当方負担。

◎本誌旧号で1―2、3、4、5、6―7、8―9、10―11の各号謄写複製本が左記幹部方にあります（各送料共一三五円）。注文は必ず楠元宛にして下さい。（1―2は一冊本。他も同様）
東京都大田区調布千鳥町七六、紀陽荘、楠元幸二

◎〝生命の科学〟〝宇宙哲学〟も在庫あり。注文は編者宛に。

◎本会の副機関誌〝宇宙同好通信〟が左記から出ています。
東京都豊島区雑司谷一丁目二九番七号、太田方、安斎純夫
（一部送料共一二五円）

◎本会東京支部主催の月例研究会が都内で行なわれています。詳細は本誌第35号の〝編集後記〟をごらん下さい。

◎次号には興味ある記事を満載します。ご期待下さい。年賀状は一切出しませんのでご了承の程を。編者宅への予告なしのご来訪はご遠慮下さるようお願い致します。（久）

日本GAPニューズレター 1969 第三七号
翻訳編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
（郵便番号 698）島根県益田市益田古川
振替・松江 二六三〇
（久保田八郎個人名義）
頒価一五〇円・送料三五円

☆禁無断転載

昭和44年1月10日 発行
不定期刊